

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	東京大学	整理番号	E01
プログラム名称	フォトンサイエンス・リーディング大学院		
プログラム責任者	福田 裕穂	プログラム コーディネーター	相原 博昭
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 優秀な学生が高い競争率の下選抜され、これらの学生に対し無理な詰め込み教育（講義）は行わず、個々の能力を伸ばす機会を与えている。博士課程教育リーディングプログラムとしては秀逸なプログラムであると評価できる。 ・ 中間評価でS評価を受けたが、幾つかの留意事項が提起されていた。今回の現地視察で中間評価の留意事項に確実に対応しており、より完成度の高いプログラムが構築されつつあることを確認した。 ・ 中間評価において学生へのアンケート調査における評価が低いことが指摘されたが、今回の支援対象学生との意見交換からは、学生の評価は概ね良好でカリキュラムが学生の育成に有効に機能しているという印象を受けた。 <p>○学位プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副指導教員制度は異なる分野の教員から学生に幅広い見識を与える役割をしており、学生の育成に有効に機能している。例えば、同じ副指導教員を持つ学生によるシンポジウムが開催されるなど、副指導教員制度をより有効に活用するための努力が見られた。 ・ 「分野横断」と「知の活用」の観点から整備された科目は、本プログラムのねらいに沿ったカリキュラムへと進化させている。これらの科目は他分野から参加した学生のハンディを低くし、一方ではプログラムを多様化することにも役立っている。 ・ 企業が関与する先端光科学実験実習は他大学へも門戸を開いている。その結果、本実習の本来の目的である企業への理解のみならず、他大学の学生と交流する機会ともなっており、学生の幅広い見識の獲得に有益な制度であると思われる。 <p>○組織・マネジメント体制等について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プログラム担当者間で本プログラムのビジョン・意識が共有され、さらに副指導教員制度も有益な制度として定着しつつある。 ・ 学生への経済的支援は本プログラムからの奨励金に留まらず、日本学術振興会特別研究員などにも積極的に応募させ、採用された場合には支給不要となった奨励金をプログラムの運営に有効活用している点は評価できる。 ・ アフターマティブ・アクションを進め、教員の多様性確保に真摯に取り組んでいる。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副指導教員を決定する際の教員側の考え方を個々の学生に丁寧に説明することが、学生が副指導教員制度をより有効に活用することに繋がるのではないかと。また、学生の産業界における将来の活躍を広げるためにも、先端光科学実験実習に参画している企業にも本プログラムの趣旨をより丁寧に説明してほしい。 			

- ・海外派遣やインターンシップへの申請の時期や回数がややリジッドである印象を受けた。カリキュラム全体との整合性の問題もあるが、可能な範囲内でフレキシブルに運用してもらいたい。また、学生の自主性と協働精神の涵養のための取組として、海外派遣・インターンシップ後の発表会を自主企画させてはどうか。
- ・専門性は問題ないと思われるものの、本プログラムの目標に向かってリーダーとしての俯瞰性、柔軟性、国際性をどのように養成したか、その成果を具体的に判断する基準（物差し）作りが望まれる。例えば、プログラムコーディネーター等からの説明で、「**Final Examination**において英語プレゼンテーションで国際性、俯瞰力を審査する」としながらも、質疑応答では「俯瞰力は数値化などができないため何とも言えない」との回答であり、評価基準にやや曖昧さが残った。
- ・最初の修了生 26 名のうち、アカデミア以外の就職先は 5 名程度に留まり、全学生数に比較してやや少ない感がある。今後、本プログラムの趣旨に添うように、産や官、また国際機関などへ進む修了生も増やすよう努力されたい。
- ・プログラムの支援期間終了後に向けた制度の恒常化に早く道筋を付け、それを学内外に発信するよう努力されたい。